わんもあ！

ぬたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わんもあ！

【Ｎコード】
Ｎ１４９８Ｑ

【作者名】
ぬたろう

【あらすじ】
私、木下菜摘（きのしたなつみ）は、美幼児になったようです。

女子大生が意識のみ赤ん坊の体に。
綺麗なおかあさまと格好よいおとうさま。
三つ離れたおねえさまと一緒に、魔法ありなファンタジーを満喫予定。

うん？大きくなったら結婚？相手は？王子様ですか？
え、まだ教えてくれないんですね。じゃあ、そんなかんじに！

プロローグ（前書き）

『』は異世界語です。

わかりにくくすいません。

プロローグ

ぼんやりと目が覚めた。
暗くて、ぼやけて、見えにくい。
ナニカが動いている。

なに？

体は動かないし、僅かな光が感じられる時もあれば、無くなる時もある。
怖い夢を見た時のように、声を出そうとしても、喉が震えてあーやうーなどの言葉しか出ない。

なんなの？
確かに私、木下（きのした）　菜摘（なつみ）は昨日、夕方にバイトから帰ってきて、レポートをすませ、寝た筈なのに。
なんで、私の大好きなグレープフルーツのアロマオイルの香りがしなくて、甘いミルクの香りがするの？

『……？』

『…！……。』

『……』

人の話し声も聞こえるが、聞いたことの無い言葉。
寝ている間に拉致られた？私なんて拉致してもたかが知れてるのに。
何か暖かいものに包まれる感覚がある。あぁ、目が開きそう。

『あ、見てかあさま！ティアのおめめはサリィと一緒よ！』
『あら、本当。ふふ、お父様とティアとサリィは同じね。』
『ティアとかあさま、かみの色同じね！』

目を開けると、すぐ近くに小さな女の子の顔。
美少女だ！いや、まだ小さいから美幼女か？
これだけ近ければいろいろ見える。他はぼんやりしか見えないが、
幼女の他には美女が。

何やら話しているが、何を言っているかはさっぱり。
外国語単位ギリギリをなめんなよ。うーん見た感じ親子かな？母と
娘、そんな感じ。

助けを求めようにも、話せない、分からない、動けないとか。
なんだか、涙が出る。悲しい。ハタチを過ぎて号泣とか、恥ずかし
いのに、私の体は言うことを聞かなくなった。

『ないちゃった。どうしよう？かあさま？』

『よしよし、いい子。きっと、眠たくなってしまったのね』

ゆらゆらユラユラと、泣きつづける私の体が浮き上がり、揺れる。
話す声が聞こえて、そのまま私の意識は暗闇に落ちていく。

1（前書き）

『』はなくなり、「」で会話になります＜＞

1

時は流れ。

こんにちは、ただ今幼児期満喫中な菜摘ちゃんです。

あれから、色々なことを体験し、自分が赤ん坊になっていること。
名前はティアノーラ、愛称はティアということ。

美幼女はお姉様、美女はお母様。あの場に居なかったが、後にやってきた、格好良いお父様がいること。

そしてここが日本ではなく、異世界リーシャルと言う国であるという事を、言葉言葉を理解し何となくだが分かった。

つらかった。
英語すら出来ない。
頭の出来が良いとは言えない自分に、新しい文法とか。

泣きそう。いや、実際は赤ん坊ですから事あるごとに泣きましたが。

ただ知識に関しては、頭が赤ん坊の為か、まるでスポンジに水が染み込むように吸収する事が出来た。
異世界だと理解した理由に、魔法が実際にあるという事。それをお母様が実際に私をあやす際に使用したのだ。

そんなに簡単に使って良いのか？魔法って。

それから月日がたち、分かったことだが、なんと私が生まれた家は貴族のお家だったようで、お家と言うよりお屋敷。
なので、お庭がとっても広い。
他にも、メイドさんに執事さんやら、わが家で働いている人がいる。
家の造りもヨーロッパな感じ。洋服も、ドレスだし。

まあ、そんな感じに私も2歳になり、よちよちとではあるが歩いたり出来るようになりました。

今も、お姉様と手を繋ぎお庭を散歩中。

お姉様の名前はサーリィア愛称はサリィ。瞳の色が綺麗な赤、と言うより朱色に近い色に、髪はサラサラのプラチナブロンド。
笑顔が可愛らしい三つ離れたお姉様。

私の面倒もよくみる優しいお姉様なのです。

そんな美幼女を姉にもつ私も、最近鏡を見て発見しました。
なんと、私も美幼女だった。お母様もお父様もお姉様も美人だから、当然といえは当然かもしれないが。

お姉様の見た目をキリッと表現するなら、私の見た目はふんわり。
ふわふわ。

お母様に似たピンクブロンドのくるくるヘアーに、お姉様と同じ朱色の瞳、と今までの私にはありえない色彩になっていた。

黒髪黒目だったのに。
せいぜい脱色した茶髪が精一杯なのに、いろいろ飛び越えたみたい。
まあ、世界を飛び越している時点で、なんでもありになっているが。

ただこのくるくるヘアーがくせものだ。時折、色んなものがひっかかる。
葉っぱや花ならよいが、ポタンやそれに付随して人間もひっかかる。
まあ、その場合は泣くだけだが。

二十歳過ぎで、そう簡単に泣くなんて…と思うかもしれないが、乳幼児期の辱めに比べたら。おむつ、入浴、おむつ、授乳。
女の涙は武器になるものだと私は理解した。

実際にお父様には有効であるし。

とりあえずは平和である。

綺麗に揃えられた芝生と、計算されて植えられた花。

まだまだ日差しが強いせいか、頭には日よけのつばの大きい帽子をかぶった幼い少女達が、手を繋いで歩いている。
それを見守る大人達と、時間が緩やかに流れている。

「ティア、ころんだら危ないからお手々離しちゃダメよ？」

「ん、ティアいい子！」

「えらいわ、ティアいい子いい子。」

そういいながら、ティアの頭を撫でるサリィ。
大人から見れば幼い少女が、それよりも幼い少女に対しているのが、なんとも微笑ましい。

「さあ、あそこの温室まで着いたらお茶にいたしましょう。」

二人に付き添っているメイドのリィに言われ、姉妹はしっかりとてをつなぎ温室を目指して歩く。

2

庭にの隅には、薬草や花々が植えられた温室がある。
四季を問わず室温は一定に保たれ、最近では姉妹の休憩兼ティータイムの場所になっている。

温室にはあらかじめ、ティータイム用にお菓子等が用意されていた。

「ティア様にも召し上がりやすいプディングをご用意致しました。どうぞ、こちらに」

メイドのリィは姉妹が生まれる前から家に勤め、メイドの中でも古株で、主人からも信頼があつい。
そのためよく二人について行動することが多い。

幼児用の椅子にリィの手を借りティアが座る。その横にサリィが座る。

「ねえ、リィ？ティアにサリィが食べさせてあげても、良いでしょ？」

二人のためにキリスと言う、ココアのような甘い飲み物を入れていたリィにサリィは伺う。

「ティアは一人で上手に食べられないもの。だからサリィ手伝ってあげるの」

おお！流石お姉様、お優しい。小さな私に食べさせてくれるんだ。
ま、相手も五歳児だし、そんなに上手に食べられないんだけどね。

「ねえさまといっしょ？」

優しくされてうれしい事にはかわりない。その上、今の私は上手くフォークを使えない。

二歳にしては頑張ってるんだけどな。

「サリィ様がですか？よろしいですよ。ティア様も嬉しそうですね」

にっこりとリィに言われ笑顔になるお姉様。

可愛いなあ。
普段は凛としてるのに、笑顔は可愛いとか。

「さあ、ティア。あーんして？」

「あー」

小さなスプーンですくったプディングを口元に運ばれ、食べる。

「おいしい？」

「おいしー！」

結局、お姉様に食べさせてもらい、全ては食べ切れず、三分の一ほど食べ残してしまった。
そして幼児ならではの状態に陥った。

「ティア、眠いの？」

「う…んん」

満腹感と散歩での疲労感からか、瞼が重力に逆らえない。閉じてしまう。まぶたが…下がっ…て……。

3

こんばんは、皆さん
ただ今私はベットの上にいます。

えぇと…おねぇさまとお散歩をして、リィのお手製プディングを食べてた筈なのに…？

んーー…寝たような気がする。
たぶん寝たんだろう。じゃなきゃ夢遊病か。

…前の生活では、バイトバイト大学バイト寝る、な生活をしてたけどここに来てからは、子供になったのもあるんだろうけど、寝てばっかだな。体が怠けそう。

そういえば、ここの生活になってから、前の生活と変わった点がもう一つ。

この部屋だ。

自分の存在に合わせたのか？という位、ピンクと白でふあっふあし

てる。
全体的な色がピンク、ベットには天蓋が付いており、それも白いレースを何十にも重ね合わせたもの。
驚くなかれ、これを全て揃えたのがお母様ではなくお父様ということ。

つり目でガタイの良いお父様だが、役職も文官?的なものらしいし、家族にもとっても優しい。
私も大好きなお父様だ。
まぁ時々、お母様の天然ぶりに振り回されているお父様にはご苦労様と言いたい。

「んんぅ〜ばんごはん…なんだろう?」

ぐぅと鳴ったお腹に空腹感を思い出す。
ぬいぐるみだらけのベットから手をのばし、サイドテーブルの上の鈴を鳴らす。

なんでもこの鈴はただの鈴では無く、魔法のかかった道具、魔法具というもの。鳴らすと対になったもの或いは、同じ型で作られたものが反応し鳴る仕組みになっている。
こちらから鳴らすときと、相手が鈴を鳴らしたときとでは音色が違うのでそれで判断するらしい。

携帯と違って話はできないけど、それ用にまた別の魔法具があるとのこと。

まあ、リィを呼ぶだけだし。その用途だけで十分だし。

前にも一度、散歩の途中で寝てしまった際、同じく寝室まで運ばれ起床後、一人で居間に行こうとしたが途中で体力が尽きはて、自宅でプチ遭難しかけた。

恥ずかしい限りだが、広い我が家は私の足にはとても広く二歳時の体力では居間までたどり着けなかった。

一人廊下にてうずくまり泣いていた私は、その後探していたメイドさんに発見され居間までつれられていった。

なんでも寝ていたはずのお嬢様がいらっしゃらないと、家族メイド執事等々…皆に心配され叱られてしまった。反省。

その後、私は鈴が渡され自室から出る際には必ず、必ず鳴らすように、一人では出歩かずに誰かと共に居る事という約束ごとができてしまった。

どうして家なのにこんなに広いんだろう。

自室といってもまだお母様とお父様のお部屋と続きのお部屋なのに…。

いろいろ不満はあったが、心配かけないのが一番という事、流されやすい日本人でイエスマンな私なのであった。

4

「お待たせいたしました、ティア様」

鈴を鳴らして、待つこと数分。
リィがやってきた。

「リィ、おなかすいた」
「かしこまりました、ではお食事にいたしましょう」

ベットに入ったままだった私は、リィに抱き上げられドレッサーの前に座らされる。

「御髪が絡まってしまっておりますので、少し整えてから参りましょうね」
「はーい」

そう言うと、手早く私の絡まった髪を少しずつ分け、リボンをつけまとめていく。
おーさすがメイド。いつみてもお上手。このくるくる猫毛をよくまぁ…感心してしまう。

「痛くはないですか？」
「うん、だいじょうぶ」
「少しいつもより濃いめのお色にしてみましたの、如何でしょう？」

おぉ！いつみても自分可愛いな！
思わずいつもよりニコニコと笑ってしまう。

「リィ、ありがとぉ」
「っお似合いでございますよ」
んん？なんだかリィが一瞬挙動不審に見えた。
…気のせいか。

「ふぅ…おなかいっぱい」
食事も済み、リィにつれられてお部屋に帰る。
今日はどこぞでパーティーがあるとかで、お父様は食卓には居なかった。

「おにく美味しかった…」
成長と共に食べれるものも増えてきた。
すでに懐かしいお母様からの授乳期間・でろでろ離乳食から卒業し、やっとモノを食べれるようになってきた。
そう言っても、まだまだ小さい手ではスプーンもフォークも上手には扱えないので、よくボロボロとこぼしてしまう。
あまり行儀の良いものではないが、皆怒るではなく微笑ましげに見ているので気にしない様にしている。

「ティア、まだ眠くないかしら？」
「はい、おかあさま」
なんせお昼寝しちゃったもんで。
扉を挟んで隣にある部屋からお母様が顔を覗かせる。
お母様は子供を二人も産んだとは見えない、この部屋の内装が私以上に似合う、少し天然の入ったかわいい系。
お父様が一目惚れをして、結婚を申し込むのもわかる気がする。

「うふふ、よい子は寝ないといけないけれど今日はお父様も遅いし、お母様がお話してあげるわ」
「おはなし？」
「ええ、ティアも気に入るわ。古いお話よ……」

うーん、結論から言おう。
お母様のお話はおもしろかった。
この世界で一番尊きものは白をまとう者らしい。人間やエルフやその他、種に限らず生まれもって白を持つ者は高貴な者になるらしい。なんでも年老いて、白髪が生えていく老人に関しては、貴き人になっていく、だから優しくしましょうと言う話もあるらしい。
うまくできてるな…と感心してしまった

だけど、話の中にでてくる気高き白き獣って…

隣の部屋にいるファルの事ですか？

5

話をまとめるとこうだ。

白き色をまとうものは尊きもので、滅多に白を纏うものは生まれにくい事。
その中でも白き気高き獣は人とともにあり、世の秩序を守るもの。
その姿は四つ足の獣に限るが、多様な姿があり気高く雄々しいもの。
悪しきものに対し、立ち向かうもの。
…らしい。

ちなみに隣のお部屋、つまり私の両親の部屋にいるファルというのは私が生まれる前から我が家にいる白い犬のことである。
乳幼児の時期には見たことが無かったが、その前から我が家におり私とは会わなかっただけらしい。
乳幼児には動物がよろしくないとかなのかな？

しかし…その話だと我が家にいるファルは聖なる獣になってしまうが、みんなの対応がそれとは合わない。

ファルはあまり吠えないがお部屋で寝転がっていると、邪魔物扱いされていることが多々ある。
ただその場合も、ファル避けてと一言言うと、むくりと起き上がりのそのそと避けていく。外に出ても自分でタオルの上を歩き足を綺麗にする。

「うーん…」

昨日のお母様のお話の後、もうそろそろ寝ましょうと添い寝をされ寝てしまったため、今は翌日の朝。昼寝をしたわりにすぐに寝付いてしまったため、昨日はあまり考えられなかった。その分目覚めはハッキリしているが。

ファルって実は凄い生き物なの？
ただの賢い犬じゃなかったんだ。
でもならなんで、我が家にいるの？

「むずかしい…」

覚えることや考えることが２つ以上あると、パンクする私にはこれ以上考えることを脳味噌が勝手に放棄した。

それにお話に出ていた犬は勇敢で雄々しいって言うから、きっとファルのような犬じゃないよね。

なんてったって、ファルは大きさはあるが前世で言うプードルのようなもこもこの犬で、勇敢と言うより物音にビビり、人見知りで他人からは逃げるおうち大好きな女の子なのだから。

「ティア…何しているの？」
「おねぇさま」

考えることをやめ、お父様からもらった熊のぬいぐるみに抱きついてもふもふしていると勉強中の筈のお姉さまが部屋に来た。

「んと、くまさんともふもふ」
「…そうなの、たのしかった？」
「うん、たのしかったの」

今の私の話し方はなるべく子供らしくなるように心がけている。
このくらいの年頃の子が、どれくらい話せるのか分からず、言葉を選びつつ話しすぎにならないように心がけ話すせいか、少し言葉足らずになる場合がある。
前世では子供どころか結婚、恋人もなくいた私の頑張りではあるが、今の私はどの位話して良いかは探り探り。

でもなぜか皆、私が話すと一瞬言葉に詰まることが多い。
そして顔を背けられることもある。あ、でも口元を手で押さえたりしているので、くしゃみなのかな？
それでもちょっぴり寂しい。

まあ、気にしないのが一番と言うことにしているが。

「あのねティア、今日私のお友達が来ているの。それで、ティアも一緒に遊びましょう？」
「いいの？」
「ええ、私もルーイもティアと一緒に遊びたいわ」

にっこり笑顔のお姉様、かわいいなぁ。
いつもは格好いい部分もあるが笑顔はかわいい。
思わず私も笑顔になってしまうよ。

「じゃあ、あそぶ」
「ふふふ、ティアかわいい。さあ、一緒に遊びましょう」

手を差し出されその手を取り、お姉様とともにご友人の所まで行くことに。
というわけで、今日はお姉様の友人と3人で遊ぶことになりました。
白い犬とかの難しいことは気にしない事にします。

これが菜摘ちゃんの前世でのモットーである。
明日は明日の風が吹くってね。

しかしここで初顔合わせになる、お姉様の友人はやっかいな方であった。知ってたら出会わなかったのになー…。

6

お久しぶりです。
本日ティアは6歳になりました。
そして菜摘ちゃんの精神年齢は、にじゅうぴーさいになりました。
…いや、隠すことでもないんだけどね。
そんな私の誕生日パーティーなるものが開催されるそうで、今日は朝から家の中はすこしバタバタとしている。

「おはようティア、6歳のお誕生日おめでとう」
「ありがとうございます、お父さま」
「ふふ、もうティアもお姉さんね」
「後でプレゼントを持っていくから楽しみにしているんだよ」
「はい、楽しみにしています」

朝食の席で家族皆からお祝いの言葉を受け取る。
ちなみにお姉様は7歳になったときから王都にある寄宿学校に通われるようになったので、今は家にいない。
ただ今日は外泊届けを出して帰って来ると手紙が来ていたので久々に家族がそろうのも楽しみ。

朝食後にリィに連れられて準備をおこなう。
用意されていた服や小物類は、瞳に合わせたのか赤系統の色が多い。
うーん見慣れてしまったけど今日はいつもに増してお姫様なドレス。
今の外見じゃなければ完全に着せられているな。

そうなのです。
今の私、前々から思っていた通り、お母様似の美少女に美幼女からクラスチェンジしました。最近よくお母様に似てきたとか、幼さの中に少し洗練された感じがあるとお父様は言っていたけど、身内の欲目？と鏡を見たら美少女がいた。
なので、発表会なフリフリも今の私には来てあげていると断言できる服なのです。

「リィ、お姉さまはまだ帰ってきてないの？」
「サリィ様はお昼頃に到着の予定でございます、パーティーも夕刻からですしそれまでにはいらっしゃいますわ」
「…ルーイさまもいらっしゃるかしら？」
「招待のお客様の中にはお名前がありますから、おそらくご一緒にいらっしゃると思われます」
「そう…」

かれこれ３…４年前？に初出会いを果たした、お姉様のご友人。ルーイ・ディステラ…なんたらかんたらと途轍もなく長いお名前のお姉様と同い年のこれまた美少女。
隣国ブルド国の出身で黒髪黒目でミステリアスな感じのする方なのだが、ちょっと…いやだいぶ人として、私が今近寄りたくない人堂々のＮＯ．１。
重度の手フェチのお方である。

初対面の私の手を気に入ったのかにぎにぎと遊ぶ間、握りしめてふにふにつつくさする、あげく食べちゃいたいとの発言に引いた。今思い出しても涙がでる。恐怖で。
お姉様はいつもの事らしく、全く動じることはなかったのだがさすがに食べちゃいたい発言には、妹の身の危険を感じ引き離してくれたが。
それからお姉様にティアを怖がらせないでと厳重注意されたが、その後合う度に、にぎにぎ・ふにふに・もみもみと揉まれ舐め回すように見られる。

合うからいけないと、あまりご一緒しないようにしようとするとわざわざ部屋まで会いに来て、捨てられた犬のような目で遊びましょうと訴えられる。
うぐぐ…そんな目で見られてしまうと負けてしまうよ。
お姉様の言う限りでは、いつもはこんなに酷くないとの事で私の手はルーイ様にとって理想の手のようだった。

そんなルーイ様もお姉様と同じ寄宿学校に行かれているので、会うのは久しぶりである。春と秋に長期休暇でお姉様は戻られるが、最近は遊びにいらっしゃらなかったので1年ぶりくらいになる。
楽しみのような、そうでないような。

「ルーイ様の他にもノウエル様やレイドズ様のご子息様もいらっしゃる予定です」
「…誰？知らない人だわ」
「ティア様のご婚約予定の方々でございますよ」

…こんにゃく？こん…やく…婚約か…

まさか自分に婚約者なんて。あはは、前じゃ考えられないな。
お姉様にも2歳年上の婚約者が居るから、私もそろそろかと思っていたけど、この誕生日のパーティーは顔合わせもかねてるんだな。
うん、なるほど。

格好良い人だといいな。美形は目の保養になるし、国の宝だよ。ちょっと楽しみになってきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1498q/

わんもあ！

2011年3月5日13時42分発行